

4月20日（日）ルカの福音書24章1～12節

「ここにはおられません。よみがえられたのです。まだガリラヤにおられたころ、主がお話になったことを思い出さない。」

安息日には戒めに従って休み、明け方早く女たちは準備しておいた香料を持って墓に来ました。主イエスのからだは見当たらなかったのに、女たちが途方に暮れていると、まばゆいばかりの衣を着た人が二人近くにきました。その二人は、驚くべきことを語ります。まず一つが、「イエスは生きています」だということです。そしてもう一つがよみがえられたということです。そして彼らは、イエスのよみがえりについて物的証拠などの何か目に見えるものを提示したのではなく、「主がお話になったことを思い出さない。」と言い、7節で「人の子は必ず罪人たちの手に引き渡され、十字架につけられ、三日目によみがえると言われたでしょう。」と言います。すなわち主の死からのよみがえりは、イエス様が前もって語られていたことの成就であったということです。そして墓から戻って、これらのことを使徒である十一人とほかの人たち全員にすべて報告しましたが、「この話しはたわごとのように思えたので、使徒たちは彼女たちを信じなかった」とありますように、キリストのよみがえりに対する信仰は、常に神のことばである聖書のみことばと結びつかなければ、たわごとのようなのです。

私たちも、クリスチャンとしてキリストが人類の罪の贖いとして十字架につけられたことも三日目に死からよみがえられたことも信じておられることでしょう。しかし、クリスチャン生活における悩みや苦難、思い煩いや悲しみの中で、生けるキリストを見失ってしまうことがあります。その中で、キリストを見上げることを忘れて、途方に暮れてしまいます。しかし、主はみことばを私たちが思い出すようにさせてくださり、死からよみがえられた生けるご自身をみことばによってお示しくくださって、私たちが信仰により再び主を仰ぐようにさせてくださいます。そのようにして主は常に私たちの信仰をみことばによって支え続けてくださるのです。

4月20日（日）コリント人への手紙第一15章12～22節

15章3, 4節で「聖書に書いてあるとおりに」が二回繰り返されている。十字架、キリストの葬り、三日目のよみがえりは、旧約聖書の成就であり、父なる神のみこころであった。

5, 6節には、キリストの復活を目撃した人々が記されている。「死者の復活はないと言う人たち」（12節）への反論

14節「宣教は空しく」「あなたがたの信仰も空しい」空しいとは、中身が何もない、内容がないということ。→効く必要のない、くだらない話しという感じ。

20節「眠った者の初穂」初穂とは、一番最初になる実で、後の実りを保証するもの。キリストの死からの復活は、私たちの死からの復活をも保証する。

キリスト教の救いは、人類の罪と死という人類がどうすることもできない根本的な原因の解決を与える。それは、人類の対する神の愛から出ている。

「もし、イエスキリストが人の罪の贖いのために十字架にかかられたこと、そして復活されたことを信じなければ、私は死を恐れたでしょう。」
(マルチン＝ルター)